令和３年度

神戸大学国際人間科学部発達コミュニティ学科

総合型選抜

表現領域受験【 音楽受験 】第１次選抜

令和２年１１月７日（土）実施

【 筆記試験 】(100 点)

音楽に関する基礎的知識、および音楽文化全般に対する関心の深さと理解力を問う検査

試験時間：60 分

（注意）

① 問題は 3 問(問題冊子は表紙・別紙を含め 5 枚)あります。
② 解答用紙は 2 枚あります。
③ 解答はすべて解答用紙の指定の欄に記入してください。
④ 解答は，解答用紙に横書きで記入してください。
⑤ 配付した問題冊子及び解答用紙等はすべて持ち帰ってはいけません。

令和３年度神戸大学国際人間科学部発達コミュニティ学科
総合型選抜
表現領域受験【音楽受験】

問 1.
　配付した楽譜に示されている、①から⑤の音程を答えなさい。複音程になる場合は、単音程に直すこと。(配点 4 点×５ ＝ 20 点)

問 2.
以下の用語について、説明しなさい。（配点６点×5＝30 点）

・ 歌舞伎

・ 京劇

・ ヴィルトゥオーソ

・ 国民楽派

・ プリペアド・ピアノ

問 3.
　配付した文章を読み、そこで指摘されている音楽学と人文諸科学との関係を踏まえたうえで、音楽学の固有性やアイデンティティについて、あなたはどう考えるか 800 字以内で論じなさい。（配点 50 点）

問３　課題文章

本書の第二の目的は、音楽学の研究方法を問い直すことである。それは同時に、音楽学の学問としてのアイデンティティを問うことでもある。1980 年代半ばにアメリカでいわゆる「新音楽学」が台頭して以来、西洋音楽史学がそれまでの様式史研究から、音楽をめぐる社会的・政治的コンテクスト、あるいは社会制度やイデオロギーといったものを重視する研究方向へ軸足を移したことによって、西洋音楽史学と民族音楽学との関係は大きく変化したと筆者は考えている。民族音楽学者の筆者の書架に並んでいる近年の西洋音楽史研究の書を数冊挙げても、たとえば、シーリア・アップルゲイトとパメラ・ポッター編集の『音楽とドイツ・ナショナル・アイデンティティ』(Applegate and Potter 2002)、ルース・ベレソンの『オペラ国家―文化政策とオペラハウス』(Bereson 2002)、ジェーン・フルチャーの『フランスの文化政治と音楽―ドレフュス事件から第一次世界大戦まで』(Fulcher 1999) など、いずれもそれぞれの主要テーマを社会史・政治史のなかに位置づけて論じており、今日の民族音楽学のアプローチに極めて近い。最近目を通したカレン・ペインターの『シンフォニック・アスピレーション―ドイツ音楽と政治 1900-1945』(Painter 2007) に至っては、研究対象や扱う資料はまったく異なるものの、研究の視点や関心は民族音楽学のそれと異なるところがない。すなわち、ペインターはグスタフ・マーラーやアントン・ブルックナーの交響曲に関する当時の膨大な批評を丹念に分析しながら、当時の音楽体験がいかに政治的なイデオロギーに色づけられ、音楽が政治的な目的に資するものとなっていったかを明らかにしている。この音楽の「政治化」(politicization) の問題は、本書第二部の中心テーマのひとつでもある。このような「新音楽学」と民族音楽学との近親性は、筆者ばかりではなくほかの民族音楽学者、たとえばケイ・カウフマン・シェレメイやジョナサン・ストックなども指摘している (Shelemay 1996; Stock 1997)。

アラン・メリアムによって民族音楽学の研究が「文化における音楽の研究」(Merriam 1964:6) と定義されて以来、原理的には地球上のあらゆる音楽が民族音楽学の研究対象となった。「非西洋」世界の音楽の研究のみならず、ポピュラー音楽の研究もとくに 1980 年代に入ると、いわゆる「ワールド・ミュージック」の台頭とも相まって、民族音楽学の主要な研究領域のひとつとみなされるようになった。それはたとえば、国際ポピュラー音楽学会の学会誌『ポピュラー音楽』第一巻にジョン・ブラッキングなど三人の民族音楽学者が寄稿していることからもわかる (Baily 1981; Blacking 1981a; Kubik 1981a)。同じ潮流のなかで、西洋芸術音楽の「民族音楽学的研究」の可能性も示唆された。西洋社会の民俗音楽ではなく、芸術音楽の「民族音楽学的」研究とはいったいどのようなものなのであろうか。残念ながら、現在の民族音楽学に関する限り、この領域ではまったく何の成果もあげていない。それまでの西洋音楽史学の蓄積に対してはほとんど何も寄与するところがないと思われるブルーノ・ネトルの論文「モーツァルトと西洋文化の民族音楽学的研究」(Nettl 1989) が目につく程度である。この民族音楽学が当初構想し、果たすことのできなかった西洋芸術音楽の研

究をまさに成し遂げているのが、じつは現在の「新音楽学」なのだと筆者は考えている。このようなテーゼに対しては、もちろん西洋音楽研究の側から物言いがつくに違いない。それを「民族音楽学的」などと称される筋合いはない、と。逆に言えば、そうした状況自体が、「民族音楽学」という名称がすでに意味を失っていることの証左なのであろう。研究対象の違いを除けば、研究方法や研究の視点に関してはほとんど違いがない以上、それらの研究はすべて区別なく一括して「音楽学」と呼んでよいわけである。

しかしここに、じつは大きな方法論上の問題が横たわっている。先ほど挙げた西洋音楽史学関係の書物には楽譜の掲載もなければ、音そのものへの言及もほとんどない。「音楽学」に学問分野としての固有性やアイデンティティがあるとすれば、それはいったい何なのであろうか。「音楽学」のある研究は、はなはだしく歴史学に傾斜している。またある研究は文化人類学に傾斜している。またある研究は社会学に傾斜している。そのようにほかの学問分野に還元できる要素を「音楽学」からひとつひとつ取り除いていった場合に、現在の「音楽学」に残る固有のものとはいったい何なのであろうか。

もちろん、旧来の音楽分析に終始するような研究、ほかの人文諸科学と対話の接点をもたないような非学際的な研究がもはやあるべき「音楽学」の姿ではないことは論をまたない。しかしそうかと言って、現在の音楽の社会史的研究が「音楽学」の理想的なあり方であるとも思われない。なぜならば、それらは多くの場合、「音楽学」の分野に固有の学問的な訓練を経ていない、ほかの隣接諸分野の研究者でさえ、研究対象を音楽に移せば多かれ少なかれ達成可能な研究領域のように思われるからである。その意味では、現在の音楽の社会史的研究はまことに興味深い発見や成果を生み出しているにもかかわらず、一面において「音楽学」としての学問的アイデンティティを喪失していると言えるのではないか。「音楽学」（とくに「新音楽学」と民族音楽学）は、それまでの音や音楽そのものの分析に過度に傾斜した研究のあり方への反省から「音楽と社会との関係」を問う研究方向へ大きくシフトしたが、その結果、振り子はもう一方の側に極端に振れすぎたのではないか。そのような危惧を筆者は近年抱き始めている。というのは、それによって逆に「音楽学」から失われたものがあるのではないかと筆者は疑うからである。そのような筆者自身の方法論的ジレンマを明確にするため、本書ではあえて二つのアプローチ、すなわち、構造分析的アプローチと社会史的アプローチを対比的に提示した。それは同時に、今述べた問題意識から「音楽学」のあり方について広く一般の音楽研究者に問いかける試みでもある。

出典：塚田健一『アフリカ音楽学の挑戦　伝統と変容の音楽民俗誌』世界思想社、2014
（なお掲載にあたって一部改変を施している。）